

「私の指導法」検証 —保育者養成科目担当者の課題—

千 古 利恵子

さまざまな「子育て支援」活動の取組と並行し、保育者養成に力を注ぐ教育機関は増加している。一方、保育者の資質・能力を問う社会の声が高まり、保育者養成機関を統轄する政府機関は、従来の指導内容を見直し、社会のニーズに応えようと改善に努めている。しかし、養成にあたる教育現場でも工夫を凝らしてはいるが、教職員の熱意だけでは思うような成果が上げられない。従って、養成校の科目担当者は、受講生の「意欲」「関心」の実態把握が先決課題になるのである。

キーワード：保育者養成、社会人基礎力、質保障、指導法、FD

はじめに

保育者養成に関わり、10年が過ぎようとしている。その間、養成校に向けられる社会の目が次第に厳しくなったと感じる。有職女性の数は増加し、待機児童問題は未だ解消されていないことから、教育機関では、保育者養成課程の定員増や課程の新設を図ったところも多い。その結果、養成校には「保育者の質保障」という課題が突きつけられている。保育者が、我が国の将来を担う子どもの成長に深く関わる仕事である以上、その養成校の社会的責任は重い。

本稿では、保育者養成機関の一員として、自身の担当科目の1つを例に、授業内で直面する保育者養成の課題を明確にし、その指導法を検証してみる。

1. 保育者は一般社会人ではないのか

保育者をも含め、社会人の育成を担う高等教育機関は、社会から厳しい評価を受けている。

その理由は、社会人として当然身につけておくべきものを習得させていないことにあるようだ。

では、高等教育に関わる者は、何が「社会人に必要なもの」と認知すべきなのだろう。教育現場では、この「何か」を廻り議論は続けられているが、確固たるものが掴めないでいる。しかし一方では、「社会人基礎力」と称するものが定められ、その内容こそが「社会人に必要なもの」という考えが定着している。まず、その内容の確認が必要だろう。

1-1 社会人に求められる基礎力

経済産業省は、「社会人基礎力」を次のように定義、提唱している。

「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年から提唱しています。

掲出した文面にあるように、経済産業省は2006年に「社会人基礎力」の必要性を社会に向けて提唱したが、教育現場の者が、この提唱に反応し始めたのはいつからだろう。筆者の場合は2.3年あたり前からと思う。「社会人基礎力」という言葉を、その内容を詳細に確認しないまま、講義時に時折口にしたこと、反省頻りである。

それはさておき、「社会人基礎力」として定めた3つの能力とそれを構成する12の要素は、次のように説明されている。

前に踏み出す力（アクション）

一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組み力

（要素）

- ①主体性＝物事に進んで取り組み力
- ②働きかけ力＝他人に働きかけ巻き込む力
- ③実行力＝目的を設定し確実に行動する力

考え抜く力（シンキング）

疑問を持ち、考え抜く力

（要素）

- ④課題発見力＝現状を分析し目的や課題を明らかにする力
- ⑤計画力＝課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
- ⑥創造力＝新しい価値を生み出す力

チームで働く力（チームワーク）

多様な人々とともに、目標に向けて協力する力

（要素）

- ⑦発信力＝自分の意見をわかりやすく伝える力
- ⑧傾聴力＝相手の意見を丁寧に聴く力
- ⑨柔軟性＝意見の違いや立場の違いを理解する力
- ⑩情況把握力＝自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力

⑪規範性＝社会のルールや人との約束を守る力

⑫ストレスコントロール力

＝ストレスの発生に対応する力

【12の要素】を見ても、保育者の養成に携わる教員ならば、特段、目新しさは感じないだろう。以下に掲出する「保育所保育指針」・「幼稚園教育要領」両者の「言葉」の【ねらいおよび目標】、小・中・高各学校の【教科「国語」の指導目標】を比較すると、その内容は概ね共通するからだ。

「保育所保育指針」

第3章 保育の内容

1 保育のねらい及び内容

（2）教育に関わるねらい及び内容

エ 言葉

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

「幼稚園教育指導要領」（第2章ねらい及び内容 言葉）には、上掲破線部の文言を記し、以下の「ねらい」掲げる。

1 ねらい

- （1）自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- （2）人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- （3）日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

就学期には、「言葉」の学習は「教科国語」が担い、発達に応じた指導目標が、以下の通り定

められている。

教科「国語」の指導目標

小学校

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

中学校

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。

高等学校

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

「国語」指導要領より

アンダーラインを付した箇所には異同が認められる。それは発達に応じて内容が深くなるからだろうが、教科「国語」の指導目標は同一であることが分かる。高等学校を卒業した生徒は、以上の指導に拠って培われた「国語力」をベースに、社会人として生きて行くのである。

つまり、経済産業省が定める「社会人基礎力」の育成は、幼児期の保育・教育にも組み込まれ、就学以降高等学校教育が終了するまで、継続されていることになる。従って、「社会人」として承認可能な人材に生育しているか否かは、その人物が在籍する最終の教育機関の指導に委ねられているのではない。幼少期に誰と出会い、どのような経験を重ねてきたか、そのことが人格形成に大きく影響し、その結果として「社会人」として承認される成長を遂げているか否かを決めるのである。このことは、保育者養成に

関わる教員は無論、成長過程にある児童や生徒の教育に当たる教員の誰もが充分承知している。しかしながら、現状は、自身に関わる児童・生徒・学生の実態に対応しきれず、成長段階に応じて設定された「指導の目標やねらい」の達成に翻弄される場面が増えているのではないかと。筆者自身、このような状況に陥ることがあることから、「社会人とは」「社会人基礎力とは」という課題を抱え悶々としている。

経済産業省は、「社会人基礎力」の提唱に際し、次のようにも述べている。

企業や若者を取り巻く環境変化により、「基礎学力」「専門知識」に加え、それらをうまく活用していくための「社会人基礎力」を意識的に育成していくことが今まで以上に重要となってきました。

この提唱を踏まえると、従来、保育者養成は、「専門知識」に的を絞り行われてきたが、それを活用するための力の育成も、新たな指導目標として捉え、別途設定することになる。養成科目に関連させれば、シラバス上に－例えば「専門知識の活用力を育成する」と－明記するのが望ましいことになる。明記した以上、科目担当者には、目標達成の義務が発生するのであるから、「社会人基礎力を有する保育者」像の検証が必要になる。

2. 社会人である保育者に求められる資質とは

現場が求める保育者の技能には一定の基準がある。拠って、技能習得科目の場合、シラバスに記載された「指導上のねらい・目的」は具体的に、受講生の理解は得やすいようだ。ところが、資格取得科目の中には、「一般教養」のイ

メージを残す科目もある。自身が担当するこの類の科目のシラバスを見ると、技能習得科目に比べ「指導上のねらい・目的」の記載に、具体性が低いと思う。具体性の欠如は、受講生の学習意欲を削ぐ危険性を孕むことに気付くべきであったと反省する。

保育者として育成すべき資質は、どのように考えれば良いのか。保育者としての資質を問題にする場合、一般企業が求める資質を当てはめることは無意味である、との意見が根強いように思う。確かに、利潤追求を目的とするビジネスと「子どもを擁護し、保育する」ことを使命とする仕事では、そこに相応しい資質は異なるのであろう。しかし、それは「子どもを理解する能力を有する」ということで、「子どもと同レベルの思考しかできなくても問題はない」という意ではないはずだ。「子ども」を理解するためには、「大人」とは、言い換えれば「大人」としての承認を得られる存在であるには、どうあるべきかを考える必要があるだろう。

ところが養成校では、学生の多くが、また教員の多くが、この「どうあるべきか」が掴みきれず右往左往する状況があると感じる。筆者もまた、その一人であることを、まず表明しておきたい。

では、この状況の打開には、何をすべきか。高等教育機関の教員は、シラバスを作成し、自身の目標を明確にすることが義務化されている。科目担当者は、自身が立てた授業計画に従い、目標達成を目指すのである。つまり、円滑に受講し、単位が認定された受講生は、目標達成の承認を得たことになるのである。科目担当者には、計画を遵守しなければ、受講生との契約違反と評されても仕方ない。評価は二の次としても、計画変更を断固拒絶しすぎると、知識はあるが思考力不足の、保育職に就く予定のあ

る「社会人」を育成し・排出するに留まるのでは、という恐れが芽生える。それは、筆者だけが感じていることではないはずだ。

自問を繰り返した結果、保育者の養成は「社会人としての育成」が先決であるという見地に立つべきであると確信するに至ったのである。それは、「問題を発見し解決する能力の育成」を担当科目にかかわらず、毎時の授業の「核」に据えることを自身に課したという意である。

3. 授業のねらいと目標

学校種を問わず、本来「授業」は、明確なねらいと目標に叶うように行うべきだろう。しかし、高等教育機関の「授業」担当教員の大半は、自身の興味・関心の度合いに沿って取り組むべき課題を発見し探求することが、大学での勉強であると指導されていたにちがいない。また、その姿勢がなければ、専門分野の知識は深まらないことも知っている。だが、自身の前にいる受講生の多くは、その「学び」の姿勢を面倒がる。自身の学生時代には「是」とされた能動的学習態度を拒む受講生に、「主体的に取り組めなければ、社会人になれない」と叫ぼうとも、耳を貸さないばかりか、頑なに拒む。

「拒絶」からは何も育たないし、育てられない。年々、受講生の興味・関心を呼び覚ます「ねらい・目標」の設定が最も重要であることを、オリエンテーション時に確認させられる。シラバスは、受講生の理解に適した文章表現か、これが点検項目の1つである。

3-1 保育者養成科目のねらいと目標

受講生の履修に臨む心理は、態度として単純に現れる。

必修科目は、それなりに真剣に聴かなけれ

ば、「不可」になると厄介である。おとなしく拝聴しておこう。選択科目は、再履修が可能だから、上手く単位をゲットできれば、ラッキー。

このような思いが反映されているのだろう。初回の授業では、そのような思いを排除し、保育者に求められる資質とは、専門的な知識を情況に応じて活用する力である、という意識の芽生えを促さなければいけない。この意識付けが充分なされていたかーこれが、第2の点検項目である。

3-2 担当科目のシラバス

担当科目「児童文学」は、2011年度入学生から、保育士資格取得の必修科目と位置づけられた。それ以前は、保育者を目指す学生が、その興味・関心により、履修の自由が認められていた。選択の自由がなくなった理由は、幼・保一元化を推進する政府方針と学科内の養成科目編成上の事などが絡み合っていることである。理由はさておき、筆者には、保育者養成に叶った指導が義務づけられたのである。以下は、2010年度前期で実践した内容である。

【講座名】 児童文学 2単位

【科目の位置づけ】 選択（幼児）＋必修（保資）

【受講者数】 144名

(47名×2 + 50名×1)

【授業の概要】

児童文学作品を鑑賞し、「子どもの好奇心・興味」とはどういうものか、考えたい。子どもに伝えたい伝統文化とは何かを考えながら、伝承に役立つ作品を作る。

【到達目標】

子どもの興味・関心がどこに向けられているのかを認識するための「子どもを観察す

る姿勢」を身につける。我が国の伝統文化に関心が持てるようになる。

【授業スケジュール】

1. オリエンテーション

2. 「児童文学」とは何か？

3.4. 「児童文学」と「児童文化財」について(1)(2)

5. 子どもが恐れる世界はあるのか？

6.7. 読みきかせに適した作品とは？

8.9. 読みきかせたいストーリーの特徴を考える(1)(2)

10. 子どもの好奇心・興味と絵本の世界を考える

11. 自由研究 「課題の決定」

12.13. 自由研究

14. 研究 発表

15. まとめ

【授業の概要】 は、以下の4点を核に作成した。

ア、児童文学作品の鑑賞

イ、「子どもの好奇心・興味」の変化を「伝統文化」の中で観察

ウ、子どもに伝えることが望ましい我が国の文化についての考察

エ、子どもの言語発達を視野に入れた、絵本制作

ア～エは、現場で実施されている行事予定を念頭に、各行事を企画・運営するために必要と推定する知識や技能の習得をねらいとし、文章化したものである。

【到達目標】 は、以下の2点を核に作成した。

オ、「子どもを観察する姿勢」の獲得

カ、我が国の多様な子どもの文化財を、子どもの「言語表現」に役立てられるようにする

オ・カは、日々変化する保育現場にあっても、保育者は、保育者として揺らぐことのない支点

が要請されているからだ。「子どもの目線に立つ」という表現が象徴するように、「子どもを観察する能力」と「子どもの成長に即し擁護・指導する能力」の獲得は、保育者として必要不可欠である。それは、多様なメニューを15回のスケジュールに組み込めば、到達可能と考えたのである。しかし、前期授業を振り返ると、【授業スケジュール】は屢々変更している。最大の理由は、メニューが多く、複数を同時に進めなければ作品完成が難しいと判断したからである。

創作する絵本は、文化の伝承に寄与する内容であることを指導した。だが、完成した作品に描かれた「文化」は、筆者の想定からは遠いものであった。それは、「文化」という言葉から思い浮かべるものが、筆者とは異なるからである。

保育者に求められる資質は、その時代の「文化」と密接に関わるものである。養成科目の担当者は、自身の生活空間を充たしている「文化」を検証し、その変化を指導内容や方法の改良に用いなければならない。その実践の有無が、第3の点検項目である。

3-3 実施例の紹介

「児童文学」の単位取得には、絵本創作の準備と作業に関する報告書の提出を課している。創作開始までの授業は、【授業スケジュール】の1～10である。その内容と直面した主な問題を掲出すると、以下の通りである。

指導内容

「読む力」の育成

- ①テキスト・資料の講読

「聞く力」の育成

- ②絵本創作のための作業説明

「思考する力」の育成

- ③創作に関する作業を想像させる

- ④作業時に発生する問題を想定させる

- ⑤想定外の問題発生を解決するための作業予備日を確保させる

指導内容別に発生した問題

- ①テキストが読めない

- ②レポート課題が理解できない

(=説明された作業内容が理解できない)

- ③作業の手順がイメージできない

- ④発生する問題を想定できない

- ⑤長期のスケジュール管理ができない

授業時に発生する問題は、担当した3クラスとも共通している。無論、総ての受講生に認められる状況ではない。実体のない完成作品をイメージし、さらにその創作過程に発生するかもしれない問題を想定することは難しいようだ。さらに、発生した問題の解決法を準備しろというのは、難題にちがいない。

保育現場では、想定外のことが連日起こり、それを瞬時に解決できなければ、子どもの安全を守れない。保育士に求められる資質は、如何に多くの問題を想定し、その解決法を準備しておく能力といえる。受講生は誰もが、この能力を備えているからこそ、無事に社会生活を営んでいられるのである。だが、学習の場になると、その能力を発揮しない。その原因は、集団の中の「私」の有り様が、近年、著しく変化しているからのようだ。

受講生は、個々に「私」の表現法が異なる。多様な「私」との関わりが成立しなければ、社会人の育成はできない。つまり、保育者養成の任も果たせないことになる。個々の「私」に関わっているか、これが第4の点検項目である。

3-4 作業内容と習得スキル

絵本完成までには、以下に抄出するような作業を課している。

ストーリーに関する作業

- ・子どもの観察
- ・ストーリーの作成
- ・ストーリーの修正
(加筆・削除)

製本に関する作業

- ・ミニチュア本作成
- ・下絵を描く
- ・紙数の調整
- ・絵の完成
- ・製本

最終作業

- ・ストーリーの書き込み

手書き あるいは 貼り付け

創作に関わる作業から、以下に掲げる能力が育成できればと考える。

作業から習得するスキル

- a、現代社会の構造を確認する
- b、現代社会の中で生きる子どもの実態を把握する
- c、大人と子どもの関係を考える
- d、観察結果を文章化する能力
 - ・日常生活の観察の言語化
 - ・言語化から文字化のための整理
 - ・日常生活を素材にした物語作り

- e、行動を計画する能力

これらの作業効果を受講生の立場から捉えると、次のように纏められるだろう。

【a～c】

社会への関心が高まる

【d】

語彙・表現が興味・関心の継続にどのような影響を与えるかを知る

【e】

衝動的な行動は、大きなリスクを生むことを自覚する

以上の作業効果を想定するものの、受講生の何%が実感しているか、実態は掴めない。ただ、

その効果を実感する受講生を増やすためには、[3-3実施例の紹介]に掲出した「作業説明が分からない」受講生への対応が欠かせない。

つまり「聞く力」の乏しい受講生に、「聞く能力」を育てなければ、先に提示した「到達目標」達成は望めないのである。その結果、取り組むべき課題が確認された。

「聞けない」のか？「聞かない」のか？

この課題解決に向けて、以下の自問自答と繰り返しの点検が必要だろう。

Q、なぜ、説明が通じないのか？

A、「受講生である私は、今何をすべきなのか。

担当者は、私に何を求めているのか」が分からない受講生がいる。しかし、そのような学生の存在を認めたくない。

実態以上に受講生の能力を低く捉える意識は、自身の指導力を過信することから起こるのではないか。経験の蓄積が、「指導力の過信」を招くかもしれない。

Q、授業時に使用している語彙は、理解を促すに相応しいものか？

A、生活環境の変化が、当然知っていると思う事象や事物の質・量を異にしている。この認識の無さが、説明不足を引き起こしている。

受講生の語彙数や文章力は、年々個人差が拡大している。特に、生活様式の変化が原因と思われる現象も多い。中でも、語句の意味範囲や用法、生活用品の知識については、顕著である。例えば、糸や縫い針に関する知識の差は大きい。木綿針と絹針、布団針と刺繍針の区別ができないため、製本に用いる「太い針と太い糸を持参しなさい」という指示は、徹底に時間を要した。生活用品は、文化の中で多種多様のものが存在している。用途を明確に説明し、使用目的に合

致したものを具体的に指示する配慮が、指導者の能力として求められる。受講生がどのような文化の中で成長したのか、その文化をいち早く受容する姿勢の欠如が、「聞けない」「聞かない」受講生を無くせない原因である。

上記のような例は、授業時には頻繁に起こる。受講生の知識や技能を育んでいる「文化」に関心を示すことが、「聞かない」「聞けない」の問題解決の糸口になる。従って、授業時に発生する問題に関しては指導者側の努力に委ねれば、いつか解決するだろう。しかし、保育者の養成において、「いつか」を待つことは許されない。

ただ、受講生に対して、職場や地域社会では、同様のことが原因で相互理解ができなくても、それは「文化の差」ということで処理されることが多い、という注意は与えるべきである。

4. 科目担当者に求められる資質とは

養成科目担当者に求められる資質とは何かと問われると、「異文化理解」の能力だと回答する。ここでいう「異文化」とは、我が国の文化を構成する「各世代特有の文化」の意である。では、「異文化理解」に必要なスキルとは何だろう。形態の異なる授業を比較し考えてみる。

4-1 「聞く力」に応じる

筆者の場合、担当する授業の形態は、対面型と非対面型の2つである。日常的には、18歳から20歳までを対象に、対面型の授業を担当している。期間が限定された対面型授業では、受講生の年齢は30代後半から70代後半と高く、現役で活躍中の人や定年退職者である。しかし、「異文化理解」に苦しむことは皆無に近い。第二の人生の準備として学ぶ人達であるから、受講の目的は明確で「聞く力」は優れている。受講生は、

疑問に応える知識と熱意があれば「科目担当者としての資質がある」と認める。

非対面型の授業は、インターネットを活用し、受講生は自身の意欲で「学び」を継続する。この場合に必要な資質は、次の2つに重きがかかる。

①1シート（画面）に書く「内容」

②聞き続けられる「話し方」

ネットで配信する資料は、授業のポイントを端的に示す内容であることが求められる。そのため、1シートに多くのことを書いてはいけない。受講生は、画像の資料を見ながら「聞く」学習を続けるので、担当者は滑舌良く、明瞭に話す技能が必要となる。コンテンツ撮影時の心得を挙げるなら、撮影作業者の反応などを視野に入れるのが良いと思う。これは、対面型を非対面型に応用すると考えた技能向上法である。

授業形態を問わず、受講生の反応を常に心にとめ、機敏に対応する能力—これが科目担当者に求められる資質である。

4-2 集団の中の「私」に留意する

近年実施されている「授業アンケート」は、「人材育成」の「質保証」を目的に、育成科目担当者の技能・意識の点検と受講生の学習意欲を問うために実施されているようだ。その効果の是非はともかく、「質保証」を目指すならば、科目担当者には、アンケート調査からは見えない受講生の人間関係を観察する力が必要だと思う。

土井隆義氏は、現代の人間像を「キャラ」という言葉で表現している。子どもがキャラ化する（キャラ化される）原因は、社会が排除型になっているからだと分析する（岩波ブックレットNO759）。受講生の言動には、一見平穏な雰囲気の中に、複雑な人間関係と小集団の上下構

造が見え隠れする。「他者」と「私」の同一化を図り、所属集団と非所属集団との安泰を保つ「私」を形成する力—それが受講生が成長過程で獲得した「社会人基礎力」なのかもしれない。

筆者が、絵本創作を単位認定に必要な課題として設定した意図は、自立した「私」の確立を願うからである。作品の創作では、生来持ち合わせた才能を直視しなければならない。社会人になれば、この状況が続くのだろう。所属集団、非所属集団の別なく、「私」は「他者」と異なる存在であることを認めざるを得ない状況に追い込まれる。それに耐えるのが社会人である。

保育者養成に必要なことは、授業時にこの体験をさせることではないのか。筆者の担当科目に絵本創作を課すのは、まさにそれを目的としているからである。[創作の断念]は[受講放棄＝単位未取得]を意味する。そこで悪戦苦闘しながら「問題からの逃避」は思いとどまり、作品完成に到達する。作品の完成は、自立した「私」を形成するきっかけになればと願うのだが。

この取り組みの成果は、最終レポートを精読し、稿を改め報告したい。

おわりに

保育者養成は、現代社会が抱える「待機児童問題」の解消に向け、今暫くは衰えないだろう。専門教育への特化は、就職に有利な資格取得と強く結びついている。本田由紀氏は、『教育の

職業的意義』（ちくま新書）の中で「緩やかな専門性」について述べる。不況・就職難・専門教育・免許、資格の取得・就職活動のサイクルで、学生は困惑している。入学前教育、初年次教育が当たり前のように行われながら、果たして専門職に相応しい「社会人基礎力」の育成が実現されているのか、また社会が求める人材育成を実現できる教員としての資質を自身が備えているのか、という自省の姿勢さえも失いがちである。

上田紀行氏は、『生きる意味』（2011,岩波新書）で次のように述べている。

他者から嫌われないために自分を透明化する。それは「他者の目」を強く意識しながら生きるという日本人の自我の構造に根ざしている。(PP.36-37)

そういう状態に陥りかけた自身を確認した—これが今回の検証結果である。

参考文献

- ・本田由紀、教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ、2010、筑摩書房
- ・加藤重広、その言い方が人を怒らせる—ことばの危機管理術、2011、筑摩書房
- ・上田紀行、生きる意味、2011、岩波書店
- ・石田英敬、自分と未来のつくり方、2010、岩波書店
- ・南澤貞美、自律のための教育、1991、昭和堂
- ・経済産業省 産業人材政策室
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm>
 (2011.9.30)